

政治家の歴史認識 日独はなぜ正反対なのか 強制収容所のユダヤ人生還者に聞く

志子田 徹

北海道新聞ロンドン支局

麻生太郎財務相兼副総理が七月の講演で「ナチスの手口を学んだらどうか」と発言し、終戦記念日には閣僚たちがA級戦犯のまつられている靖国神社を参拝、安倍晋三首相も直前まで取りざたされた。戦後六八年を迎えた今年の夏も、日本の政治家たちは、戦争責任に極めて鈍感な態度を世界に発信した。

他方、同じ敗戦国であるドイツのメルケル首相は八月末、ナチスの強制収容所跡を訪れてユダヤ人ら犠牲者の冥福を祈り、ドイツが過去に犯した戦争犯罪に今も向き合う姿勢を示した。戦後、共に経済大国となった点は共通する日本とドイツだが、政治風土は正反対になったのではないか。強制収容所から奇跡的に生還した九三歳のユダヤ人マックス・マンハイマーさんに会い、あらためて日独の違いについて考えた。

アウシュビッツそしてダッハウ マンハイマーさんの三つの人生

マンハイマーさんへのインタビュは九月一日、ドイツ南部ミュンヘンの郊外にある自宅で行った。移動する時は車いすが手放せず耳も遠くなっていたが、七〇年前の出来事については鮮明に覚えていた。「強制収容所に入る前、収容所での生活、収容所以後」。収容所のせいで、私は三つの人生を生きた」。そう前置きしてから、マンハイマーさんは静かに語り始めた。

当時のチェコスロバキア、現チェコで一九二〇年に生まれたマンハイマーさんは、商店を営む両親や兄弟と共に「ごくごく平凡に暮らしていた」が、三八年一〇月一〇日、故郷にナチスが侵攻してから、人生は突然、暗い坂を転がり落ちていく。ユダヤ人に対する嫌がらせや露骨な差別が日に日

に強まり、マンハイマーさん一家は引越しを繰り返して逃れようとした。だが四三年一月、ついに一家に現ポーランド南部のアウシュビッツ強制収容所への出頭命令が下され、二月一日深夜、強制収容所に到着する。

「八人家族は列車が収容所に着いた途端、性別や年齢で選別されたため、さよならを言う間もなくばらばらにさせられた。後に知ったことだが、両親と妻はガス室に送られてしまった」。マンハイマーさんはアウシュビッツから各地の収容所などを転々とさせられて、過酷な肉体労働を強いられた。

行く先々で待っていたのは、続出する病死者や餓死者、そして拷問による虐殺。「真冬に氷のように冷たい部屋に裸で押し込められ、冷たい水を掛けられた。看守は、私たちを苦しめただけだったのかもしれない」。

四四年夏に移されたミュンヘン北西のダッハウ収容所は、ナチスが政権を掌握してすぐの三三年に造った最初の強制収容所だった。骸骨のようにやせ細っていたマンハイマーさんは死体を運ぶ仕事をさせられ、チフスにかかり生死をさまよう日々を送る中で四五年四月、米軍に救出されて一命を取り留めた。八人家族で生き残っていたのは、弟と二人だけだった。ダッハウ収容所では、ユダヤ人だけでなくドイツ人の政治犯や障害者、同性愛者ら延べ二〇万人以上が収容されて、

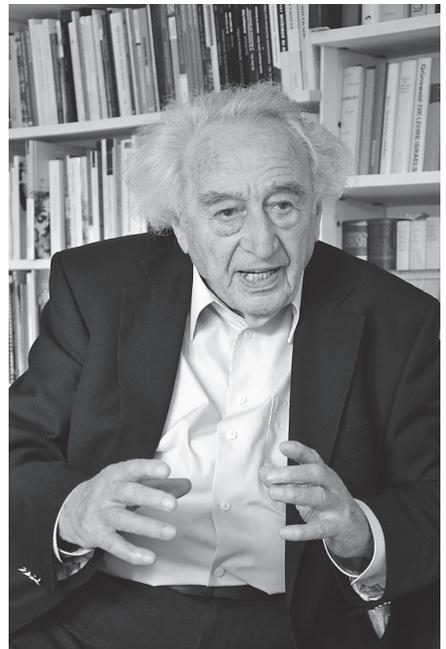
四万一〇〇〇人以上が犠牲になった。

戦後しばらくはドイツに二度と足を踏み入れまいと思っていたが、「あの恐ろしい過去を決して繰り返してはならない」と決意し、自らダッハウに近い町に移り住んだ。八〇年代からは自身が被った非人間的な体験と独裁政治の恐ろしさを次世代に伝えようと、ドイツ各地の学校を回って講演活動を続けている。

過去のドイツの加害責任を自覚 戦争責任を受け止める共通の倫理観

そのマンハイマーさんが今夏、メルケル首相をダッハウ強制収容所跡に招き、ユダヤ人ら犠牲者を追悼してもらうことを企画した。なぜ首相を収容所に呼ぼうと考えたのか、マンハイマーさんの考えはこうだった。「メルケル首相が来れば、現職のドイツ首相としては初めてナチスの強制収容所跡の訪問だ。訪問すること自体が、過去のドイツの戦争犯罪に対する厳しい批判と、犠牲者を大切に思う気持ちを表すことになる。そのことをきっかけに多くの人が、あらためてドイツが過去に犯した罪を思い起こす機会になる」。

マンハイマーさんの念頭にあったのは、極右ネオナチによる衝撃的な事件だ。二〇一一年一月、「国家社会主義地下組織」を名乗るグループが二〇〇〇年から〇七年の間にトルコ系移民八



ナチスの強制収容所から奇跡的に生還したユダヤ人のマックス・マンハイマーさん。93歳の今も学校を回って戦争体験を語り続ける。「ドイツは民主主義が根付いたから独裁政治はもう現れない」

人、ギリシャ人店員一人、女性警官一人の計一〇人を殺害していた事実が明るみになり、ドイツ社会に大きな衝撃を与えた。さらに、その後の捜査や今年五月から始まった女性メンバーの裁判の過程で、ネオナチ政党「ドイツ国家民主党」との関係が疑われること、警察や情報当局による見過ごしや過失、怠慢があったことなどが次々と判明していった。

「二部とはいえ、人種差別をする過激な若者が出てきたことが心配だ」。マンハイマーさんは、メルケル首相の収容所訪問でナチスの非人間的な行為にあらためて注目が集まって、ネオナチの動きの抑制につながることを期待したのだった。

ちょうど首相が九月二二日の総選挙に向けたキャンペーンでダッハウ近郊を訪れることを知ったマンハイマーさんは、首相に収容所訪問を求め

したか知らねばならない。今回の訪問が過去と現在、未来への架け橋になることを望む」と話し、若い世代にドイツの過去の過ちを知ることの重要性を訴えた。

しかし、この時点で総選挙まで約一カ月。選挙を控えた時期に、ドイツの戦争責任をメルケル首相は強調したことになるが、マイナス材料になる懸念はなかったのだろうか。近年の日本の首相や政権与党の幹部が、中国や韓国などにある日本軍の虐殺現場を訪問して献花した例はほとんどないだろう。ましてや選挙前であれば賛否両論が巻き起こって選挙運動にマイナスの影響を与えることを懸念するはずだ。

ところがドイツでは、野党各党はメルケル首相の収容所訪問を「総選挙に向けた人気取り」だと批判した。つまり、首相が収容所の犠牲者を追悼

る手紙を送った。首相は訪問を約束し八月二〇日、ダッハウ強制収容所を訪れ、車いすに乗ったマンハイマーさんと共にユダヤ人ら犠牲者に献花した。首相は「収容者の運命を思うと、深い悲しみと遺憾の念に胸が詰まる」と語り、過去の加害責任を直視する姿勢を強調した。さらに「若者はドイツがどんな悲劇を起こ



マンハイマーさんが収容されていたドイツ南部のダッハウ強制収容所。8月にドイツの現職首相としては初めて、メルケル首相が訪問して犠牲者を追悼した

することは、多くの国民に支持される「人気のある行為」なのだ。メルケル首相の行為も野党の反応も、日本の文脈からは理解しがたい。

このことに関連して、ドイツ政治史が専門であるグーテンベルク大のアンドレアス・ルーダー教授に、ドイツの政治家の倫理観について聞いた。教授によると、ドイツ国民は今なお戦争責任を極めて深刻に受け止めており、政治家も同じ倫理観を持っている。とくに六〇年代後半の学生運動の

盛んな時代から、過去にどう向き合うかが世代間で論争になり、悪いのはナチスだけでなく、国民の加害責任もあることが強く自覚されるようになった。政治家も、戦争で犯した罪を明確に認めている人が大半だという。こうした歴史認識が背景にあるため、ドイツの政治では、自分たちの過去に犯した加害責任を表明した方が「人気取り」になる。A級戦犯の加害責任に目をつむろうとする日本の政治家とは大違いではないか。

「ナチスに学べ」とは独裁と虐殺を学ぶこと

戦後の「奇跡的な復興」から経済大国に這い上がってきた日独だが、政治風土はなぜこれほど異なってしまったのか。「最も大事なことは、教育だ。ドイツの戦後教育は二度と独裁政治を生んではいけないことを必死に教えており、それが大きな成果を挙げている」とマンハイマーさん。ドイツでは日本の中学生の年齢あたりから、ナチスの罪を徹底的に教えた上で、いかに独裁政治を防ぐか、議論を重ねて自分の意見を持つように鍛えられる。

「独裁を防ぐには、民主主義が育たなければならぬ。戦後のドイツは教育が民主主義をしつかり根付かせた。民主主義が機能しているので、たとえ少数のネオナチがいても、それを大きく上回る人々が大規模な反ネオナチのデモを行っている」。そして、「自分の体験は死ぬまで語り続ける

つもりだが、私がいなくなっても、ドイツは心配ない」と付け加えた。

最後に、日本へのメッセージを聞いた。著書「アウシュビッツでおきたこと」（角川学芸出版）が翻訳され、マンハイマーさんの歩みを追ったドキュメンタリー映画「白いカラス」も日本語字幕で上映されるなど、日本でもマンハイマーさんのことを知る人は多く、日本人の知り合いも多いという。「日本人は自分の会社のために休みを返上して働くんだから、ドイツ人には真似できないな」と、まずは勤勉さを賞賛してくれた。

だが、次の瞬間、マンハイマーさんの目が曇るのが見えた。麻生財務相が「ナチスに学べ」と発言したことに言及して「ナチスに学ぶとは、独裁と大量虐殺の方法を学ぶことにほかならない。日本人も、経済より何より、まず人間性を大事にする国民であってほしい」。そう語った時のマンハイマーさんの悲しげな表情が、今も目に焼き付いている。

へしこだ とおる